年間第十七主日

ヨハネ6・1-15

2018.7.29

高円寺教会9：30ミサ

大西勇史神父（岡山教会助任司祭）

イエスが病人たちになさったしるしを見た、とか、人々はイエスのなさったしるしを見て、とあります。わたしたちのカトリックは、しるしをとても大切にします。「しるし教」と言ってもいいでしょう。目に見えない神があの手この手で、ご自分の愛を感じてもらうためのしるしをいろんなところに散りばめて、工夫と言うか、配慮、優しさですよね。「分からないだろうから、こうしてあげるよ」って神様が言ってくださっている。教会はそのしるし、秘跡を中心にしているグループ、仲間たちですけれども、やっぱり極めつけはご聖体でしょう。これに勝るしるし、分かりやすさはない。「ああだこうだ言ってもなかなか伝わらないし、みんなもう、ぼくを食べて」って言っちゃったんですよ、神様がね。あるとき、もうもどかしくてしょうがなくって、天から降りてきて、直接しゃべってたし、直接食事もし交わりを持っていたけれども、それでもなお伝わらないから、「もういいや」って言って、その身を全てわたしたちに明け渡してくださった。イエスキリストというしるしです。もうそんなしるし、ない。そんな分かり易さ、ない。わたしたちは今ここでも、そのような分かり易い「しるし教」を生きています。

まあ、そうは言っても、先程冒頭でわたし「高円寺教会で信徒として大変愛された」と言いました。言いましたが、なかなかその愛というのを、そのときは感じにくい。振り返ってみると、「ああ、あそこにあったな。ここにあったな。やっぱり自分は愛されてたな」っていうことを思うんですけど、そのときはなかなか感じにくい。神様のそういう配慮、そういう工夫、そういうやさしさに気づきにくい。

わたし、３月２１日に叙階の恵みをいただきましたけれども、その日も、わたしにとっては、分かりにくい日だったんですよ。なぜかって言うと、今年の３月はとても暖かかったですね。２０度ぐらい、ずっと、暖かった。例えば東京は３月１７日にもう桜が開花してました。あぁ、それなのに３月２１日だけは桜の花びらに雪がかかった。という程寒かったんですよ。山口はどうだったかというと、３月２０、２１日だけ嵐のような天気。わたしね、１２年かかっ

ているんですよ、神父になるのに。普通６年ですよ。「倍かかってやっとこさたどり着いた晴れの舞台だ。神様、ありがとう」。で、土砂降りですよ、その日。（笑）　もうね、ちょっと「やっぱし、俺、駄目なのかな。祝福されてない、これ？」とか思っちゃいますよね。ただでさえそんな気持ちが強いんですよ。落ちこぼれ感というか、あんまりうまく行ってないから。なんかそういうのを積み上げてるわけですね、１２年間、せっせと。それなのにその日にまだ、なおそんな状態で、「あ、もうこれ終わってるな、俺」と、「全く祝福されていない。やっぱりおまけだったな」そういう感じだったんですね。

で、山口教会、わたしが叙階式をしていただいた教会は、およそ人が入れるのは３００人。どれだけ詰めても３００人しか入れない。ただし、当日来られた方たちは９００から１０００人だったんですね。ま、これ、わたしがすごいんじゃなくて、それだけ年数がかかってるから関わった人が多いっていう話なんですけど。（笑）　ただそれだけ。で、残り７００人はどうしたかっていうと、軒下みたいなところに、この教会も軒下があるじゃないですか、ああいうところにギュウギュウに押し込んで、そこでモニターを見てもらう。軒下ですから、雨は凌げるけど、ほぼ外なんですよ。気温４度とか、もう雪が降るぐらいの気温ですから、その中を、叙階式って長いじゃないですか。参列された方はご存知と思いますけれども、約２時間とかあるんですよ。そういう状況の中で、なんか申し訳ないじゃないですか。わたしのために来てくださった方たち、ずっとお祈りくださって駆けつけてくれた方たちなのに。だから「神様、なんの意味があるんですか、この雨には。このシチュエーション、この出来事を、どういうメッセージで皆さんに伝えたらいいのか」っていうことを朝からずっと祈り、考えてました。「こりゃ困ったもんだ」と。

で、受階者っていうのは、叙階を受けるその人っていうのは、会衆席の一番前に座るんですよ。そこに座って、呼び出されたら前に出てくる。で、叙階されるともう祭壇側っていうような、そういう流れなんですけど、ですから、皆さんの祈りだとか歌声だとかを途中まで背中にすごく浴びるんですね。それはそれはたくさん浴びて、その時ようやく、はたと気付くんですよ。「この大雨の中、この悪天候の中、これだけの方がわたしのために、来てくださっている。頑張ってほしいと思っている。期待している。希望だと思ってくださっているんだ」。

この出来事はそれをわたしに分からせるために神様が下さったしるしなんだ。そう思えたんですよ。愛されてるとか、期待されてるとか、あなたは希望だっていうことの実感の薄い子なので、神様、最後の最後まで、「もういい加減分

かれよ。お前、１２年間ずうっとみんなに祈られてきたし、これから先もそのまま行くんだ。わたしはお前を守ってきた」っていうことを伝えるためだったんだぁ。と思ったら、泣きそうで。わたしにとっての叙階式のピークは間違いなくあの答唱詩編のあたりです。ダメかな、典礼的に。（笑）　ま、でも、ぼくにとっての叙階式のピークはあそこだった。神様が特別に愛してくださっているっていうことを、最後の最後まで、もうだって次こっち側に回ったら、自分がそれを皆さんに告げて回る番じゃないですか。「あなたたちは愛されてますよ。大丈夫ですよ。信じていきましょうね」っていうことを自分が言うぎりぎりの段階まで、自分が励まされているっていう、なんかほんと、最後まで親が面倒をみてくれているっていう、そういう温かさに包まれて、感動しました。

　ちなみに、これ、皆さん持ってくださってますか？　カード作りました。叙階記念カード。簡単に説明しておきます。言葉はイザヤ書からとりました。「わたしがここにおります」という、イザヤの召命と呼ばれている、神様に呼び出されたときに「はい、わたしがここにおります」と言う箇所を選びました。なぜこれにしたかって言うと、叙階のときの呼名ですね、「ヘルマン・ヨゼフ大西勇史」と呼ばれると、日本では「はい」と言って立ち上がります。だけど、典礼書のラテン語規範版、大元になっているものは、ここは「アド・スム（ad sum）」っていう言葉を使います。その意味は、これ、「わたしがここにおります」という意味です。だから「大西勇史」と呼ばれたら、「はい、わたしがここにおります」と言って返事をするんです。わたし、「その言葉、もらい！」と思って、ここにこの言葉を書きました。

　すてきな言葉だなあと思っています。「わたしがここにおります」。なかなか、なんかちょっと自信満々で言っている感じがするじゃないですか、「はい、わたしがここにおります」って。だけど、普段のわたしはそうじゃないですね。もちろん、さっきから言ってるみたいな、あんまり上手にできてなかった、弱いなぁ、罪深いと思ってますから、むしろ「わたしじゃない彼」とか「わたしよりあの人がふさわしいんじゃないか」とか「まあ、わたしなんか声かかんないよね。最後の方におまけでひっかかればいいや」みたいな、なんかそんな気持ちで普段わたしいますから、あんまり「はい、わたしがここにおります」って言えないんですよ。だけど、どんな自分であったとしても、汚い自分、隠したい自分、嘘つきな自分、ずるい自分、逃げたい自分、卑怯な自分、たくさんの自分を抱えるじゃないですか、どんな自分であっても、それをご存知の神様が呼んでくださるのならば、呼んでくださったのならば、わたしは、「ここにおります」と答えたいと思った。もちろん、後のことは分かりません。答えた

は良いけどあまりうまくできませんでしたってことは経験上よくあるから、そのことは置いておいて、まずは何よりも「わたしがここにおります」と答えたい。そういうわたしの決意表明として選んだつもりです。

ちなみに、神様から呼ばれたときに、恥ずかしい、裸だから出てけないって言って、自分の恥ずかしさ、または、自分の醜さを隠そうとして出てかなかった人たちをわたしたちは良く知っている。それはアダムとエヴァがそうだった。呼ばれたときに出ていけなかった、神様のところに、ね。同じ失敗しちゃダメだと思うんですよね、やっぱり。イエス・キリストによってその傷を回復していただいた、失楽園の傷を回復していただいたわたしたちは、おなじ失敗しちゃダメだと思っています。わたしもそう信じて、呼びかけてくださった方に、「うまくいくかどうかわかんないけど、わたしここにいます」、やっぱりそう言いたい。そういう思いで、これ選びました。ちなみに、そういう神様にたいする信頼感、安心感のようなものが、わたしは、これからの世の中、絶対に必要になってくるって思っています。全然足りてない、世の中に。もったいないと思っている。カトリックだけがその秘密を知っていて、その秘密をあまりうまく他の人たちに分かち合うことができていないことをとってももどかしく思うし、とってももったいないことだと思っているので、どうぞ皆さん一緒に、「いやいや、もうわたしは年だから」とか言わないでくださいね、もう死ぬまでですよ、宣教っていうかね、「安心していい。神は愛しているんだ。神は働いているんだ」っていうことをそれを知らない人に告げてって欲しいと思いますよ。なんかこう、「失敗続きの弱い神学生がいたんだけどね、そいつもなんとか叙階されたんだよ」っていうことをやっぱり話してあげてくださいよ。「ちょっとやそっとの失敗とかね、なんか幸不幸とかね、そんなものを超えて、きちんと神様が働いてるんだ、大丈夫だ、あなたの現実に必ず働く、今持っている悩みや苦しみは必ず良くなる」っていうことを伝えていきましょう。わたし、それやっていきます。

ここでそういう福音を語っていた多くの神父様たち、わたし最も影響受けたのは、ご存知の通り晴佐久昌英という神父ですけど、わたしも負けませんよ。(笑)　あれ？言い過ぎ？　負けませんよ。だってわたし自身そういう福音に救われたんですから。福音が人を救うということを体験していますから。あとは信じてひたすらに宣言するだけです。彼の言い方だと、倦むことなく。今に見ておれ、と思っています。がんばります。今日はわたしの原点であり、聖地である高円寺教会でそのことを宣言できて、とっても気持ちいいです。ありがとうございました。引き続き、幸いなミサを続けてまいりましょう。